

CONTENTS

蘭学・洋学 三津同盟 締結!!	2
オムニバス講演会	3
友の会のページ 創立40周年記念事業・史跡見学会	4
冬季企画展 生誕 200 年記念 宇田川興斎	5
NEWS FILE・新収蔵資料紹介	6
資料館展示品から	7
INFORMATION (催し物のご案内)	8

洋学 資料館

No. 29

March, 2022

鏡野町羽出西谷の雪景色です。紀州(和歌山)の聖医華岡清洲が開いた医学塾春林軒に、天保13年(1842)8月27日に入門した水田敬道はこの地の出身です。父の秀斎が鏡野町上斎原から羽出に移って医者を始め、その長男の敬道は医学修行のため華岡に入門したのです。写真の中央、右から2本目の電信柱の左下に雪をかぶった水田家墓所の生け垣が見えます。その一郭に敬道は眠っています。初めて墓石を確認したのは今から20年ほど前で、敬道は帰郷後間もない嘉永2年(1849)8月24日、27歳で早世したことが分かりました。かつてその奥には屋敷が建っていたそうです。この雪原にたたずんでいると、人の営みの儚さが一層胸に染みてしまいます。

(苫田郡鏡野町羽出西谷) 文・写真: 名誉館長 下山純正



津山洋学資料館
TSUKUBA ARCHIVES OF WESTERN LEARNING



○中津市：福沢諭吉



○津山市：津田真道



○津和野町：西周

いずれも明六社の結成メンバー

「三津」出身の洋学者

○中津市



中津市歴史博物館

ほかに、福沢諭吉旧居や村上・大江医家資料館。

○津山市



津山洋学資料館

ほかに、箕作阮甫旧宅や宇田川家三代墓所など。

○津和野町



津和野町郷土館

ほかに、西周旧居や森鷗外記念館など。

「三津」の洋学関連施設



蘭学・洋学 三津同盟 締結!!

昨年11月18日(木)、津山洋学資料館で、大分県中津市・島根県津和野町と津山市が「蘭学・洋学三津同盟」を締結しました。

同じ「津」の字でつながり、共通の歴史的背景を持つ三津町が、相互に連携・協力して学術研究と知的観光を盛り上げ、地域の活性化につなげていこうとするもので、津山市が提案して実現しました。三津町には、江戸後期から明治初期にかけ、共に優れた蘭学者・洋学者を輩出したという、共通の歴史的背景があります。

中津市では、『解体新書』の翻訳を主導した前野良沢、慶応義塾を創設し「ペン」は剣よりも強し」の名言で知られる福澤諭吉などが有名です。国史跡の福澤諭吉旧居や福澤記念館、医師の旧宅を活用した村上・大江医家史料館などがあり、2019(令和元年)、中津市歴史博物館が開館しています。津和野町には、幕末にオランダ留学した哲学者で官僚の西周や、陸軍軍医で数々の小説を書いた文豪の森鷗外などがいて、国史跡の西周旧居や津和野町郷土館のほか、森鷗外記念館などがあります。そして、津山市。津山藩医で蘭学

研究を歴代が継承・発展させた宇田川家三代、幕末に対米露交渉で活躍した箕作阮甫、津和野町の西周とともにオランダ留学した、法学者で官僚の津田真道などがいて、国史跡の箕作阮甫旧宅に隣接し、全国で唯一「洋学」の名が付く、津山洋学資料館を整備しています。

さらに注目したいのが、中津の福澤、津和野の西、津山の津田は、いずれも日本初の学術団体「明六社」の結成メンバーだということです。明六社は、1874(明治7)年に始めた機関誌を、当時の発行部数としてはとても多い、約3200部発行するなど、政治、外交、教育を始め幅広い分野で近代的思想の普及に大きな影響を与えました。

来年は、この明六社結成から150年という節目の年に当たり、三津同盟に基づく事業の一つとして、記念企画展の共同開催を予定しています。今後の同盟の動きに、ご期待ください。

オムニバス講演会を開催しました



まず、「温泉に魅せられた津山の洋学者たち」(近都)というテーマで、宇田川玄真・榕菴や箕作阮甫、久原躬弦など、津山ゆかりの洋学者と温泉との関わりをひも解きました。次に「津山の最後のお殿様の最期」(小島)では、最後の津山藩主で廃藩置県の直後に他界した松平慶倫について、治療に当たった藩医による容体書から、その最期の様子を紹介しました。

令和4年1月30日、オムニバス講演会を開催しました。「洋学あれこれPartⅢ」と題して、職員が日々調査研究している事柄を、個別テーマでご報告しました。人を超える聴講者に恵まれました。寒さ厳しい中にもかかわらず、資料館まで足をお運びいただき、まことにありがとうございました。

友の会
の活動

友の会創立40周年記念事業

津山洋学資料館友の会は、「楽しみながら洋学を学ぶをモットー」に活動を続け、創立40周年を迎えました。

■ 箕作家墓所整備事業を実施しました



記念事業として8月から箕作家墓所の整備に着手しました。墓所の登り口にあった木製の案内標柱の立て替えのため、石材店と調整し、9月24日（金）に木製標柱を撤去して新しく石柱を設置しました。

また、箕作阮甫生誕200年記念事業として1999（平成11）年に整備した墓所内の解説板と標柱の木部劣化が進んでいたため、10月上旬に修繕作業を行いました。整備の完了後、10月9日（土）に案内石柱の除幕と市への贈呈式が行われました。

支部の寺本勝支部長が出席され、小原龍二友の会会長が、市長へ目録を手渡し、この2人で除幕を行いました。

■ 植栽整備ボランティア活動

墓所の整備事業に並行して10月2日（土）には、友の会有志の皆さんが墓所周圍の生け垣の剪定や草取り作業などを行いました。とてもきれいになりました。



■ 第34回友の会史跡見学会

津山城下の史跡を訪ねて（城下編）

12月5日（日）、第34回史跡見学会を実施しました。今回は徒歩で津山城周辺の史跡を巡りました。

最初に訪れたのは、二階町の作州種痘館跡付近です。幕末に開設された種痘館では天然痘予防のための牛痘種痘が行われました。次に久原躬弦・茂良生誕地に移動し、兄弟を顕彰する記念石柱を見ました。かつて友の会が建立に携わった石柱です。

それから、北上して田町に至り、そこでは津山藩医 芳村杏齋開業地跡を確認しました。さらに北上し、椿高下を歩き、明治屋創業者 磯野計生家跡や津山藩医 久原甫雲屋敷跡を見学しました。続いて地蔵院境内にある津山藩主松平慶倫と夫人儀姫の墓をお参りしました。ここには、遺言により儀姫の遺髪と爪が埋葬されています。墓碑の裏側に乳がんを患っていた

ことが記されているのを見て、参加者の方々は儀姫の最期に思いを馳せておられました。しばらく歩いて最後に、北町の津山藩医 宇田川興齋屋敷跡を訪問しました。現在は、屋敷跡の北西隅に解説板が立てられています。当日は一時雲行きが怪しくなりましたが、無事に日程を終えることができました。

地蔵院でマスクをとって記念撮影



冬季企画展

生誕二〇〇年記念 宇田川興齋

■ 会期：令和3年11月27日（土）～令和4年2月20日（日）

宇田川興齋は1821（文政4）年に美濃国大垣城下俵町（現在の岐阜県大垣市俵町）の医師 飯沼愨齋の三男として生まれました。昨年、生誕200年を迎えたのを記念し、企画展を開催しました。

興齋は江戸へ遊学して、津山藩医 宇田川榕菴に学び、その才能を認められて24歳で榕菴の養子となります。1846（弘化3）年に幕府の翻訳機関である蜜書和解御用に手伝として出役を命じられました。この年の6月、榕菴が49歳の若さで病没してしまいます。興齋は家督を継いで藩医となり、和解御用での仕事も引き継ぐことになりました。

ペリーが黒船を率いて来航した際には、同じ津山藩医の箕作阮甫とともにアメリカの国書の翻訳を行いました。翌年ペリーが国書の返事を聞くために再来した際には、津山藩の命令で黒船の偵察も行っています。また、ロシアのプチャーチンが下田へ来航した際にも、阮甫とともに幕府の応接使に随行して現地へ赴き、翻訳の業務に従事したのでした。

幕末に幕府が参勤交代を緩めると、津山藩でも江戸詰の藩士が減らされ、興齋も1863（文久3）年に家族をともなう津山へ引越しました。9年後の1972（明治5）年に旧藩主夫人に従って東京へ戻りますが、宇田川家の中では興齋が一番長く津山に住んだことになりました。その間には長州戦争への従軍や各地への出張、藩主の診察や藩主夫人儀姫の乳がん治療などにもあたり、多忙な日々を過ごしました。1881（明治14）年に隠居し、1887（明治20）年5月3日、肺結核のため、洋学者として生きた67年の生涯を終えました。

会期中は2度の展示替えを行い、多くの方々が来館されました。観覧された方は、榕菴の後継者として外交・医療・教育に活躍した宇田川興齋の活動に思いを馳せておられました。



NEWS FILE

洋学史学会若手部会の
ワークショップ開催

9月5日、会議システムZoomを利用したオンラインワークショップ「これからの洋学のはなしをしよう―地域と洋学、津山洋学資料館の取り組み―」（主催：洋学史学会若手部会、協力：資料館、後援：洋学史学会）が開催され、学会員らが洋学を発信することについて考えました。

ワークショップは二部構成で、資料館図書室から職員による講演の後、下山名誉館長同席のもと、参加者を交えた意見交換が行われました。

講演では、資料館の設立経緯や展示内容、友の会事業、市民への広報活動のほか、「蘭学・洋学三津同盟の取り組み（2〜3ページ参照）」が紹介されました。

意見交換会は、参加者からの質問に答える形で進められ、定刻を過ぎても数多く質問が寄せられるなど、活発な議論がなされました。

榕菴モチーフの曲 鶴山に響く

9月21日、「観月と邦楽の夕べ」が鶴山公園で行われ、若手演奏家・作曲家の薮井佑介さんによる5次元キーボードなどの最先端楽器を駆使した演奏の動画が収録されました。薮井さんは、数々の受賞歴を持ち世界的に活躍する岡山出身のアーティストで、資料館での調査のうえ、西洋音楽にも関心を寄せていた宇田川榕菴をモチーフにした楽曲も作曲して披露されました。コロナ禍により無観客開催となったのは残念でしたが、中秋の名月をバックにした渾身の演奏は圧巻でした。



新収蔵資料紹介

寄託

■薬看板 8点
液体目薬精銚水などの看板を12月に津山市在住の安藤眞二さんから寄託いただきました。

寄贈

■「解剖攬要」版本 3点
東京大学初代解剖学教授の田口美和が著した解剖書の版本です。
4月に津山市在住の林洋光さんから寄贈いただきました。

オンラインでの授業に出講

オンラインを活用した授業で、市内の小学校4年生に津山の洋学の魅力を伝えました。
1月19日、西小学校と資料館をZoomでつないで、展示室の案内をしながら、職員が小学生の質問に答えました。この出講を機に興味を持ち、実際に来館してくれた方もいました。

能勢家旧蔵資料

計110件115点
鶴田藩医・能勢家の資料です。2月2日、寄贈者の大森博文さんを資料館にお招きして感謝状を贈呈しました。



購入

■書簡一括 6通
呉文炳書簡、呉建書簡、石阪堅壯書簡、箕作元八書簡、呉文聰書簡、石川千代松書簡です。
■能勢道仙写本 41冊

幕末〜明治初年
鶴田藩医・能勢道仙が筆写した漢方医学書の写本です。実子の萬が整理した木箱2箱に収納されています。
■大槻盤溪書簡 1通
(明治3年)12月11日付
箕作秋坪宛てに書物を送るよう伝えてあります。

■疱瘡絵(赤絵) 2枚
疱瘡(天然痘)の護符代わりに用いた、赤い色の木版画です。

資料館展示品から

漢詩に託した晩年の想い

箕作阮甫の書幅



(読み下し)
自ら晒う白頭半死の翁 手に椒酒を把りて春風に対す
世人識らず 心中の事 誇りて道う 長生は化工を賦うと
壬戌(文久2年)11862 試筆 竹雨老人

(語句解説)
○晒…あざ笑う。
○椒酒…山椒など調合した酒。ここでは屠蘇酒を指す。
○化工…自然のわざ。天地自然のたくみ。

幕末の対米露交渉において才能を発揮した津山藩医の箕作阮甫。彼のことを「優れた蘭学者」と称するのは、その当時から現代まで、おそらく変わらないものと思われま

す。ただ、個別細分化された学問に接している現代の私たちが「蘭学者」と言うとき、現代の学者のあり方に影響されて、蘭学だけを専門的に研究している姿を無意識のうちに想像してはいないでしょうか？

江戸時代の知識人たちは、基礎教養の一つとして、まず漢学・儒学をひととおり勉強していました。四書五経などの古典を、内容の理解は後回しにして繰り返し音読する素読から入り、漢詩も単に古典を暗唱するだけで

はなく、自ら創作できる域にまで到達していたのです。

孫の呉秀三が著した伝記によると、阮甫も漢詩を作るのが得意であったらしく、宇田川玄真に入門して間もない頃に自作の漢詩を見せたとき、「いくら詩が上手でも、李白や陶淵明には及ぶまい。本当に蘭学をする気なら、詩などはやめるがよい」と戒められ、きっぱりやめてしまったとあります。しかし、実際には自作の漢詩集の原稿が残されており、趣味の一つとして生涯楽しんだようです。

右の書は、その阮甫が他界する前年の正月に、年始の書き初めとして自ら詠んだ七言絶句の漢詩をしたためたものです。還暦を過ぎ

て白髪頭となった自らを、半ば死にかけた老人とあざ笑い、また一つ年を重ねた正月にお屠蘇を味わいつつ「長生きは自然に反するものだ」というそしりを意識しながらも、心中に秘めたある想いをにじませていきます。明言してはいないその想いは、読み手が自由に想像できますが、死の間に遺した漢詩で「若い頃から勉学に励んできたが、学業を成すことなく、六十余年の自分の志に背いてしまった」と詠んでいるのに近い心境ではなかったかと思えます。消え失せない向学心と衰えていく肉体とのはざままで揺れ動く阮甫の心情が、ひしひしと伝わる書です。

文：館長 小島徹

